

〈論文〉

「キリスト・クリシタン」の意味と表記の変遷

— 国語辞書と青空文庫を中心に —

李 明 心

キーワード：キリスト，クリシタン，基督，国語辞書，青空文庫

1. はじめに

現在日本語で使われている「キリスト」、「クリシタン」の語は何回かにわたる表記の変化を経て現代に到っている。日本に初めてキリスト教が入ったのは1549年宣教師のザビエルによる。つまり、1549年から「キリスト」、「クリシタン」の語は日本で使われたと考えられる。しかし、日本の歴史においてキリスト教は禁教の時代もあるのでこれらの語が封印されたこともあった。禁教は開国により解け、1889年大日本帝国憲法によって信教の自由が認められた。禁教の時代を除くと約400年間この二つの語が使われていたといえよう。

「キリスト」の語は「きりしと」の表記を始め「基督」、「きりすと」、「キリスト」などいくつかの表記が使われ現在はおもに「基督」、「キリスト」のように表記する。

「クリシタン」は「きりしたん」という表記を始め、「貴理志端」、「貴理死丹」、「鬼利支端」、「吉利支丹」、「クリシタン」、「切支丹」などが使われて、現在は主に「クリシタン」、「切支丹」の表記が使われる。

本稿では「キリスト」・「クリシタン」の語が外来語として日本に入り、どのような表記の変化を経て現代に至っているかを明らかにすることを目的としている。

2. 「キリスト」、「クリシタン」の語の意味

「キリスト」とは救世主を意味する。元来ギリシャ語の「khristos」は油を注いで清められた者を意味する。キリスト教ではイエスを救世主として「キリスト」と呼ぶ。

「クリシタン」とは室町時代の末期、日本に伝来したキリスト教（カトリック教）、またその信者を指す語である。しかし、今は「隠れクリシタン」、「クリシタン大名」、「クリシタン版」、「クリシタン奉行」、「クリシタン文学」、「クリシタン屋敷」などを表す時に用い、キリスト教の信者をいう

時は主に「クリスチャン」、「キリスト教信者」などで表す。

3. 表記の変遷

上述のように「キリスト」、「キリシタン」の表記の変遷は幾度もあるが、どのような変化があったのか、変化の流れを探ることにする。

3.1 調査方法と資料

国語辞書を調べ、二つの言葉の表記の変遷、また、使われた書籍を調べ整理して比較する。『日本国語大辞典第二版』(2001)によると大正時代以降は表記の変化が見られないので国語辞書はその以前の辞書までとする。

さらに、辞書から得られた表記をキーワードとして青空文庫のホームページ (www.aozora.gr.jp) で検索し、その作品の年代を調べる。

3.2 調査結果

3.2.1 キリスト

まず、『日本国語大辞典第二版』(2001)によると、

「キリスト」とは日本伝来当時は「キリシト」であったが、江戸時代後期から「キリスト」となった。中国イエズス会士によって、音訳語「基利斯督」およびその略語「基督」がつくられ、「基督」はプロテスタント宣教師に受け継がれ、19世紀中葉の漢語聖書用語として定着した。また、日本でも明治初年から「基督」が当て字として新教系の刊行物で用いられ、明治中期までには一般的表記法として確立した」

という。しかし、日本語訳聖書では文語訳も口語訳も一貫して「キリスト」の語が用いられている。

表1(『日本国語大辞典 第二版』(2001)による)から分かるように「キリスト」は「きりしと」→{「キリスト」、「基督」}の順に表記が変わり、明治以降は「キリスト」、「基督」の両方の表記が

表1

年	書名	作者	表記
1593	病者を扶くる心得		きりしと
1605	妙貞問答 下		きりしと
1886	改訂増補和英語林集成		Kirisuto, キリスト, 基督
1914	道程	高村光太郎	基督
1919	或る女 前・七	有島 武郎	基督
1933~37	若い人 上・一	石坂洋次郎	キリスト

使われるようになった。ここでは、「改訂増補和英語林集成」に載っているローマ字表記の「Kirisuto」は扱わない。

3.2.1.1 国語辞書

次に表記の変化が見られた明治時代の国語辞書を調べると次のような結果が得られた。

表 2

年	辞書	表記	意味
1888	漢英対照いろは辞典	きりすと	基督（耶穌の名にして救主の義）Christ
1889	和漢雅俗いろは辞典	きりすと	基督（耶穌の名にして救主の義）

表 2 の辞書ではひらがなの「きりすと」の表記が使われていたのが分かる。

年度から見ると「きりしと」→「キリスト」、「基督」→「きりすと」の順になる。

表 3

年	辞書	表記	意味
1893	日本大辞書	きりすとます	英語, Christmas ノ 訛り
1896	帝国大辞典	きりすとます	英語の Christmas の 訛り
1897	日本新辞林	きりすとます	英語 Christmas ノ 訛り, 耶蘇降誕節, 西洋にて十二月二十五日の祭り。

表 3 に挙げた辞書には「きりすと」、「きりしと」の表記は載っていないが「きりすとます」の表記が載っている。『日本大辞書』と『帝国大辞典』では「きりすとます」の語を単に英語の発音のなまりと説明しているが『日本新辞林』では他の辞書とは違って「きりすとます」を「耶蘇降誕節」と説明しているのが新しい。つまり、「きりすとます」はクリスマスをいう。

3.2.1.2 青空文庫

以上の辞書から「きりしと」、「きりすと」、「基督」、「キリスト」の四つの表記が用いられたことが分かった。次に、青空文庫ではこの四つの表記が使われているのか、また、よく使われている表記は何かを調べる。青空文庫に載っている作品数は約 7,700 件である。その中で四つのいずれが使われている作品は約 420 件である。

「きりしと」平仮名の「きりしと」の表記が使われたのはわずか二つの作品である。芥川龍之介の『きりしとほろ上人伝』（1919）と宮本百合子の『長崎の印象（この一篇を N 氏, A 氏におくる）』（1926）である。いずれも年代はそう古くはないが作品の内容がキリシタン時代の物語であるため、古い語をそのまま作品の中で表現したと思われる。

「キリスト」カタカナの「キリスト」の表記は四つの表記の中で一番多く検索された。検索された作品は 1891 年から 1956 年までで約 260 件（62%）である。「基督」のルビにも使われたのを含むと約 360 件である。

「基督」漢字の「基督」の表記が検索された作品は153件で約36%ぐらいである。年代は1887年から1968年までである。「基督」は単独で表記しているのもあり、「きりすと」、「キリスト」、「ハリストス」、「クリスト」のルビが振られているものもある。

一番多いのが「^{キリスト}基督」で、次が「^{ハリストス}基督」、次は頻度は少ないものの「^{ハリストス}基督」、「^{きりすと}基督」、「^{ノエル}基督」の順である。

「^{ハリストス}基督」が検索されたのはロシア文学を翻訳した作品（「六号室」アントン・チェーホフ（瀬沼夏葉訳））である。翻訳する際、「基督」の語にロシア語をそのままルビとして振ったと思われる。

「ハリストス」とは『大辞林』によると「ロシア語の [Khristos] でキリストのことをいう。日本正教会では主に「キリスト」を「ハリストス」と呼ぶ」という。

「^{ノエル}基督」の表記は一ヶ所だけある。岡本かの子の「街頭（巴里のある夕）」の中で「^{ノエル}基督降誕祭」と表現している。作中のパリの街の風景を描く場面でクリスマスをフランス語の「ノエル」と表現している。

「ノエル」とは『新漢和大辞典』によると、フランス語の [Noel] でクリスマスやクリスマスの季節、クリスマス・キャロルなどをいうと述べている。

「きりすと」の表記がある作品は五つで、1915年から1952年までで「きりすと」、「きりすと教」、「えす・きりすと」のような表現で用いられている。

以上、「きりしと」、「基督」、「キリスト」、「きりすと」の四つの表記がどの程度用いられているかを青空文庫で調べた。一番多く使われている表記は「キリスト」(62%)、その次は「基督」(36%)、「きりすと」(1%)、「きりしと」(1%)の順である。

3.2.3 キリシタン

『外来語の語源』(1979)によるとキリスト教が日本に伝来した当初は南蛮宗、天主教、後に吉利

表4

年	書名	表記
1599	ぎやどべかどる 上・一・三	きりしたん
1600	どちなきりしたん 序	きりしたん
1605	妙貞問答 下	貴理志端, きりしたん
1656	乾坤弁説 序	鬼利支端
1676	集義和書 八	吉利支丹
1701	浮世草子・傾城色三味線 京・一	切支丹
1797	契利斯督記	吉利支丹
1914	外来語辞典	キリシタン (切支丹)
1933	天草土産	切支丹

支丹とよばれたが、禁教後、特に將軍徳川綱吉以後は吉の字をはばかり切支丹、切死丹などと書かれたという。

表4（『日本国語大辞典 第二版』（2001）による）から分かるように、「キリシタン」の表記は1599年から見られ、いくつかの変化を経て1914年以降は現在使われている「キリシタン」、「切支丹」の二つの表記が使われているのがわかる。

きりしたん→貴理志端→鬼利支端→吉利支丹→切支丹→キリシタン

3.2.3.1 国語辞書

上述のように1914年以降は表記の変化が見られないので明治時代の辞書のみを調べた。

表5

年	辞書	表記	意味
1888	ことばのはやし	きりしたん	切支丹
1888	漢英対照いろは辞典	きりしたん	切支丹（洋教の名今の耶穌教又其信者）
1889	和漢雅俗いろは辞典	きりしたん	切支丹（洋教の名今の耶穌教又其信者）
1889～91	日本辞書言海	キリシタン	切支丹（基督の訛）
1893	日本大辞書	きりしたん	切支丹（モト西班牙語、Christian の訛り）
1894	日本大辞林	きりしたん	切支丹（宗門の名）
1896	帝国大辞典	きりしたん	切支丹（もと西班牙語の Christian の訛り）
1897	日本新辞林	きりしたん	切支丹（西班牙語の Christian の訛り）

表5に挙げた国語辞書では『日本辞書言海』の表記は「キリシタン」、その他は平仮名の「きりしたん」となっている。しかし、意味の説明はそれぞれである。「キリシタン」とは元来キリスト教とその信者の二つを指していたが、国語辞書ではこの二つの意味を説明しているのもあり、さらに「基督の訛」や「宗門の名」、「Christian の訛り」と説明している。

3.2.3.2 青空文庫

次に、文学作品には「キリシタン」の語がどのように表記されているかを調べる。以上から得られた「きりしたん>貴理志端>鬼利支端>吉利支丹>切支丹>キリシタン」の表記を一つずつ検索すると「吉利支丹」、「切支丹」、「キリシタン」の三つの表記が得られた。しかし、「きりしたん」の表記は「吉利支丹」、「切支丹」のルビとして用いられているだけである。検索されたのは「吉利支丹」が13件、「切支丹」が91件、「キリシタン」が10件で合計114件である。

「きりしたん」平仮名の「きりしたん」の表記は単独で使われたものはなかった。漢字の振り仮名で使われている。「吉利支丹」のルビに2回（1927年、1941年）、「切支丹」に35回（1905年～1954年）使われている。

「吉利支丹」の表記で検索された作品数は13作品で1879年から1950年までである。「吉利支丹」は単独で用いられているのが4回、その他はルビが付いている。ルビとして用いられているものにはカタカナの「キリシタン」は7回、平仮名の「きりしたん」は2回である。

「キリシタン」カタカナの「キリシタン」の表記は10件の作品に検索された（1928年～1950年）。しかし、漢字のルビとして主に使われている。

「切支丹」の表記は91件の作品に検索された（1902年～1954年）。主にルビが付けられている（約70%）。

以上、「キリシタン」に対する七つの表記を青空文庫で調べた。その結果、「きりしたん」、「吉利支丹」、「キリシタン」、「切支丹」の四つの表記が使われているのが明らかになった。一番多く使われた表記は「切支丹」（80%）、次が「吉利支丹」（11%）、「キリシタン」（9%）の順である。「きりしたん」の表記はルビだけで使われている。ルビは平仮名の「きりしたん」、カタカナの「キリシタン」両方見られるが、「きりしたん」はわずかで、主に「キリシタン」の方が用いられている。

4. 「キリスト」、「キリシタン」の音訳

「キリスト」、「キリシタン」の語は16世紀に外来語として日本に入って来た語である。[Christo]はポルトガル語で日本語では「キリシト」と発音していた。この[ch]が[k]ではなくて[キ]と発音しているのはなぜか。矢崎源九郎（1964）によると語頭の子音が連続する場合そのあとにつづく母音と同じ母音を語頭の子音にそえて発音したからであるという。さらに、「キリシト」になるのは順行同化の影響であるという。つまり、前の母音の影響をうけて[シ]となったということである。

5. まとめ

今回の調査で「キリスト」、「キリシタン」という言葉は戦国時代から使われてきたのが明らかになった。また、何回かの表記の変化を経て現代に至っているということが分かった。「キリスト」は「きりしと」から「キリスト」にかわり、「キリシタン」という語はあまり使われなくなり、その代わりに「キリスト教」、「キリスト教信者」、「クリスチャン」などのような語が使われるようになった。また、青空文庫に収められている文学作品では主に「キリスト」、「基督」、「切支丹」の表記が使われているのが分かった。今回の調査で見付けられなかった「キリシタン」に相当する表記がいくつかある。それらには「貴理志端」、「鬼利支端」、「切死丹」などがある。これらの表記はどのような文献で用いられているかを探るのは今後の課題の一つである。

参考文献

- 矢崎源九郎（1964）『日本の外来語』岩波書店
吉沢典男・石綿敏雄（1979）「外来語の語源」角川書店
李 明心（2006）「日本におけるキリスト教文化に関する研究」（明海大学大学院応用言語学研究科博士前期課程学位論文）

辞書

- 高橋五郎（1888）『漢英対照いろは辞典』大空社
物集高見（1888）『ことばのはやし』大空社
高橋五郎（1888-89）『和漢雅俗いろは辞典』大空社
大槻文彦（1889-91）『日本辞書言海』大空社
山田美妙（1892-93）『日本大辞書』日本大辞書発行所
物集高見（1894）『日本大辞林』宮内省
藤井乙男・草野清民（1896）『帝国大辞典』三省堂
林 甕臣・棚橋一郎（1897）『日本新辞林』三省堂
小稲義男（1980）『新漢和大辞典』第5版 研究社
日本基督教協議会文書事業部（1991）『キリスト教大事典』改訂新版 教文館
松村明三省堂編修所（1998）『大辞林』第2版 三省堂
小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典』小学館

インターネット上の文献

- 青空文庫 www.aozora.gr.jp